説教要旨「新しい革袋に」

ルカによる福音書５章３３～３９節

断食はいわゆる苦行の一種です。罪人である自分が神様に祈り、悔い改めを言い表すのですのですから、その時に呑気に食事などしているようでは、本物の悔い改めではない。ということです。ですから、断食して祈ると言うよりも、悔い改めの祈りから断食が必然的に生まれるのです。

ところがイエス様と弟子たちはその断食をしていなかった。全くしていなかったわけではないと思います。けれども、人々の目に印象づけられたのはむしろ、イエス様と弟子たちが、徴税人レビの家で催された盛大な宴会の席に連なり、喜んで食べたり飲んだりしている姿(5:29)です。ヨハネの弟子たちやファリサイ派の人々は熱心に断食をしているのに、あなたがたは徴税人の家で楽しく宴会をしている、それで本当に神様を信じ従って生きていると言えるのか？そういう批判が投げかけられているのです。

断食は本来、悔い改めと結びついているものです。しかし、断食がその本来の精神から離れて陥りやすい落し穴があります。自分に苦しみを課してそれに耐えることによって救いを獲得することができる、という勘違いをしばしば生んでしまうのです。自分はこれだけ断食をして、熱心に悔い改めている、ということを人に見せようとする、ということが起る。そのような見せかけばかりの断食はもはやただファッションです。本当に悔い改めるとは、神様の恵みによって罪を赦していただき、神様のもとに立ち帰ることができた、その喜びに生きることであるはずなのであって、いかにも断食をしています、ということを表面に出すのは、自分の悔い改めを誇ろうとしているのです。

イエス様が共にいてくださることを喜び、分かち合うという新しい信仰のあり方に対して、断食という苦行に象徴される、自分の努力と精進で悔い改めて正しい者となろうとする古い信仰のあり方によって批判したり規制しようとすることは間違っているのです。

私たちが何をしたか、何をしなかったとは関係なく、ただ与えられた神の愛を感謝し、喜び祝う。そこに新しいぶどう酒が注がれます。イエス・キリストという花婿を迎える婚礼の客としての、喜びと祝いに生きる信仰が与えられていくのです。

（２０１８・７・１５　説教者：稲垣真実）